

■只野真葛(工藤綾子)

幕末に際立って開明的「独考」を著し、厳しい批判受け絶交された滝沢馬琴により名が遺った。

ただのまくず

.....1763=

江戸築地で、仙台藩医工藤平助の第一子長女に生まれる。名はあや子。
父は、藩主に盛んに意見を具申し、学問・商売・訴訟など幅広い活動をし、当時一流の多方面の人物とも交流、茶道・歌道はじめ料理から賭博までと趣味も広く、尊敬に値し、母は父と同業仙台藩医と「宇津保物語」を著した桑原やよ子との娘で、古典に詳しく歌も良く詠むといった環境のなか、父の養母たる祖母ゑんに寵愛されて育ち、早くから国文・和歌に秀で、
弟長庵が誕生すると、
「開放的な父ですら、女は学問しなくて良いというような世間を知って、
この頃、荷田蒼生子に「古今集」の読み癖を直してもらうなどするか。
「女の本」になりたいと志す。
明和の大火後の被災者の苦しみを目の当たりにして、「経世済民」を志す。
父が將軍側室付き奥女中と付き合いのあったことから、江戸城西の丸で狂言を見る。

錦絵始・・・1765= 2歳

.....1770= 7歳

御蔭参流行・1771= 8歳

田沼意次老中・1772= 9歳

大原騒動・・・1773=10歳

弟源四郎が誕生。この頃、祖母桑原やよ子にならい、「さとり」を開きたいと願う。

.....1777=14歳

汐船蝦夷来 1778=15歳

全く気質の異なる工藤家と桑原家の確執が強まり、
父が家を増築しその豪奢さが評判になった頃から縁談が舞い込むが、祖母、両親が反対、
母の勧めで、仙台藩の奥女中となり、藩主伊達重村夫人に仕える。

以後10年、奥女中を勤める間、人間関係に苦慮、摩擦避けながら誠実に働く「独り役」をマスター、

.....1781=18歳

天明大飢饉始1782=19歳

蘭学階梯・・・1783=20歳

田沼意次刺殺1784=21歳

姫君の結婚に伴って彦根藩井伊家に仕えるに至る。この年、父平助が「赤蝦夷風説考」を著す。
天明の大火によって、実家が焼失、父は大事にしてきた全てのものを失い、意気消沈、
再建も詐欺にかかって失敗、粗末な家に仮住まいとなる間、

田沼意次失脚1786=23歳

寛政改革始・1787=24歳

.....1788=25歳

初の横綱・・・1789=26歳

末妹照子が誕生、2人の弟・4人の妹となった途端、後継ぎとなるはずだった弟長庵が病没。
寛政改革で父が表舞台から退場するなか、敬慕していた祖母ゑんが死去して、辞職を考え始め、
姫君の夫井伊直富が病死して姫君が出家したのを機会に、奉公を辞して江戸に戻り、

異学の禁・・・1790=27歳

混浴禁止・・・1791=28歳

ウスマン来日・1792=29歳

松平定信引退1793=30歳

父が勝手に決めた酒井家に嫁ぐも、相手が余りに老人で、泣いてばかりいたため、直ぐ離縁となる。実家に
戻って、病弱の母を助け、妹たちの面倒を見ていたが、
妹つね子が結婚する一方、既に嫁いでいた妹しず子が死去。

この年、父平助が林子平の「海国兵談」の序文を書く。

母が死去して、一層家事全てが身にかかるなか、

父が後妻を迎えると、没落した工藤家の再興を図ろうと悲壮な覚悟で、

昌平饗始・・・1797=34歳

古事記伝・・・1798=35歳

蝦夷地直轄始1799=36歳

伊能測量始・1800=37歳

仙台藩家臣で江戸番頭只野伊賀の後妻として再婚、夫を江戸に残し、先妻の男子3人の待つ仙台へ下る。以後、只野家仙台屋敷に居住し、江戸に戻らず。

夫が帰郷。おじから多くの本を送られ、塩竈神社への紀行文が村田春海に賞賛され、
「文筆に開眼、

夫・嗣子が江戸に出、留守番。夫とも親愛になり、結婚2年あまりの日常記す「みちのく日記」成る。

長く患っていた父平助が膨大な借金を残して死去。長弟は夭折していたため、次弟源四郎が後を継ぎ、遺族は父の親友大槻玄沢の世話になる。

この頃、七人兄弟を秋の七章にたとえ、自らを(真)葛と号し、関心事を内面に閉込めながら育んで行く。

嗣子が江戸に赴いて話相手がなくなると、孤独感が高まり、

「望郷の念強く、亡父平助の夢を見、思いつめるうち、物の道理を一気に直覚する「抜け上がり」を体験。

青洲麻酔手術1805=42歳

いざワ報復・1806=43歳

汐船狼藉・1807=44歳

「まがつ火をなげくうた」ほか次々執筆。
唯一の理解者源四郎までが急逝して衝撃、工藤家の後継に母方桑原家から養子が入って乗っ取られた形になり、その乳母を代表に確執が強まって行き、

フェートン号事件 1808=45歳

ゴロブシ拿捕 1811=48歳

高田屋拿捕・1812=49歳

前年かこの年、本居宣長「古事記伝」を読む。桑原家への憤懣も頂点に達し、以後、一寸も穏やかならず、
弟になりかわって工藤家を再興し、父平助の業績を世に知らしむる思いも強く、
夫が江戸に出る。叔父桑原朝純が死去。妹栲子に母の思い出をと「むかしばなし」を書始め、

江戸で夫が急死の報せに衝撃、末妹照子も死去するなか、膨大なものになって完成し、栲子に送付。

この間、只野家が代官と漁業権紛争して解決、村田春海の弟子清水浜臣に歌や文の添削受ける。

妹栲子も奉公先の姫が死去して出家、全ての身内を失い、

.....1815=52歳

*兄弟7人のことを「七種のたとへ」に書いた後、著しく健康を害して右手が不自由になり、回復後も執筆が困難となって、死まで願うほどになるなか、夢の中で、突然仏の啓示を受け、
「真葛がはら」成立後、「不動尊に奄って確信を得ると、世に出る決心。

伊能測量終・1816=53歳

杉田玄白没・1817=54歳

水野忠成老中1818=55歳

群書類従完結1819=56歳

「奥州ばなし」・紀行文「磯づたひ」が成立。「独考」を出版しようと決意、序文を書き、

江戸在住の妹を通じて、全く縁のなかった滝沢馬琴に突然「独考」の添削・出版を依頼、馬琴が怒ったのに非礼を詫び、それまでの著作も次々送って文通するうち、厳しい批判の書「独考論」と絶交状が送られ、

.....1820=57歳

*馬琴に礼状と礼物を送り、馬琴からの礼状に返礼の書簡を送って、交わりを断ち、

以降に、「異国より邪法ひそかに渡、年経て諸人に及びし考」を執筆したらしいが、

以後、世に知られないまま、

異国船打払令1825=62歳

没した。

没後、強烈な印象をうけた馬琴が同好の士の集まりで真葛のことを発表、それが「真葛のおうな」として掲載され、「独考論」の最後に工藤氏の願いで執筆したと書いて、後世に残ることになった。